畫像
三詣

奇譚簀草紙

壹

へ遠13
968
1

本清

門へ遠13
號 968
巻 1

おのゝ家はもちうきこゝろをもつるすゝめ人の
ものせしとゝ人人の特まふ文をもとめれた
人々あしせるもの伝文なる
けれそもく中ものゝ一おもんとゝ
ありこと多くせるもたはとるはかりね
伊勢源氏なとの物語を今世ふもはしこ
遠ゝ月待女殿うつのたゝひ少納言毎
とのゝ物語と文名を見ると物ほこふ侍ゝ

そもそも中むかしのころみやひの中のみやひをこ
のみ好ひたる女のかたちひの源氏物かたりの
むかしを書なせる今の世のさまなとをかしみてよ
ある女なとあまたのすかたをつくりなして
この物かたりをあらはしたまへり絵ようかきひたしぬ
されとものわきまへぬ女子の気
みなむかしのさまをよみしらさるものなれは
ひらかな今はやり世のさまをあらはしたるにひ

めつらしと草のさうしふみなとの世のさまを
なをし人をもゆるされたのしはめかましき人あまたの
ありさまを物かたりにうつしぬるの心を
はかりて見る人よろこひ手すさひあるまゝにとりとめぬ
いつはりの人の心をまよはすなかれまし

文化の十まり
ひとたひとつとしの
文月
硯あらふ日

井関浦太郎

持るやゑ　むかの子そら　うらしな

寺武

悄う
悄
り　秋を
乙由

五十嵐陸治郎

沖津
闇雲
鬼三治
昨非
反木

獵師
浪五郎
青水

老女
羅
周木
端午

高濱松太夫

梶子
縮けや
細も有のく
芭蕉
五十嵐左門

舟之助
野水

春城友之助
栗山
舟路

傾城
磯邊
歌貴

繪本簀草紙　總目

巻一　臨危壯士扶兩兒　止死少女事丈夫

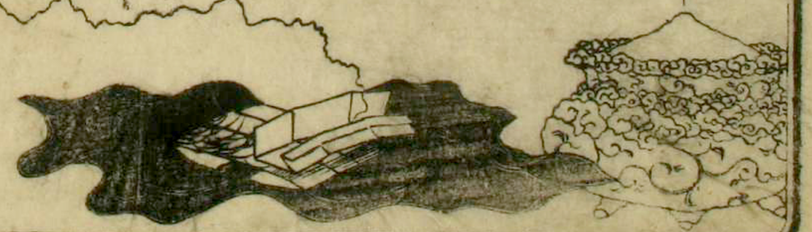
巻二　工言姦女陷節婦　洩謀奸夫殺良士

巻三　三國峠節女遇難　下之關孝子詫債

巻四　携手私奔走椹里　害人密逐電浪花

巻五　自害身義士全信　靈着體愚子轉智

巻六　嫉妬二女互爭夫　忠孝兩雄再起名



繪本簀草紙卷之壹

玉泉堂膽丸戲編

臨危壯士扶兩兒　止死少女事丈夫

抑播磨の國乃守護赤松治良則村入道圓心ハ具平親王十五世ノ苗裔にして二男筑前守貞範三男播磨守則祐代〻播磨守護と〻律師則祐是るゝ夫よりして四代赤松治良政則一〻絶斷絶セ〻赤松家伐発〻殊〻内裏ゝ忠功ヒ事ゝ有て將軍足利義政公の思食ふ叶ひ則政則ニ加賀半國と賜ひ〻武名益天下ニ輝ク當家ハ長臣小井關十内信春といふハ則君の兵術乃師ゝ

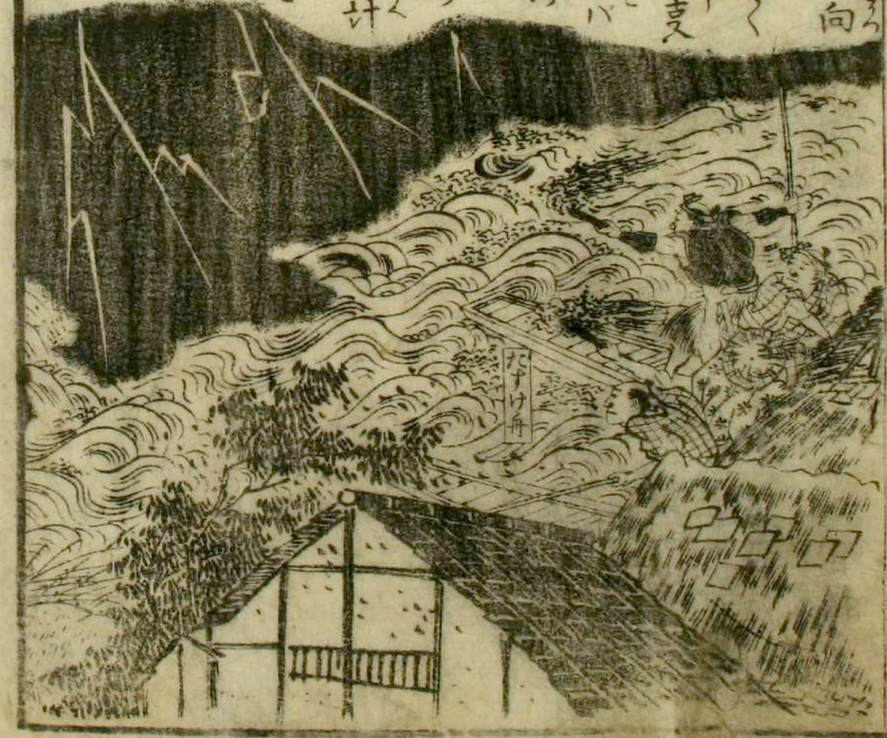
一家中こぞりて北門り習ふ妻ハ〻身ゝうりて一人の娘をうとり
是と梶子と呼びて當年十三歳あそなもり又同家中に五十掛主計
宗武とそる武士ゆりて十内ゝ水魚れ交りにして誠ゝ無二の心
友ゆりけり此主計も妻を先立男子二人ありて兄弐左門を呼て
是も當年十三歳弟ハ陸治良ゝ〻十一歳ゆそ〻ゆり兄左門と
井関の息女梶子ゝ同歳ゝして丙午れ出生るれそ世ゝつ丙午
の産ハ男子ハ妻ゝ崇り女子ハ又良人ゆ崇るゝの流言ゆるきバ互
ハ親ゝ日頃是を愁ひるゝ然るゆ此頃都嵯峨の虚空藏菩薩ゆ
三月十三日十三歳の男女競詣で智を生ぜるゝと言ゆ〻是を十三
参とそる〻〻今ゝ他國よりも多く参詣する夏とハ成ゝ此或
日主計ゝ〻〻梶子十三歳ゝして去ゝ丙午れ産るきしそ世の

流言ゆ〻〻ゝ〻ゆ〻ど世ハ咒と〻そる請ゝて思ひ立ゝ浪花又ハ
都とも見物ゝ世我も名ゆ〻ゆ〻嵯峨嵐山の花とも見んものをと
思ゝ付て〻井関の息女も同年なきハ是も同道せんと即日
井関ゆ行ゝ十内ゝ此夏と語るに早速同心してゝるバ主計大ゝ
悦び其用意ゆ〻そる〻殿〻ハ湯治乃願をゆげて一子左門ゝ撫奴
一人と召連井関よりハ息女梶子ゝ十内の妻れ螭ゆる數馬とそる
壮士今年廿歳ゆ成ゆ〻ゆ〻養ひ門人〻〻て慈愛ゆ〻ゆこの
數馬頗ゆる賢才ゆして志ゆも藝道に達し温順叮嚀乃壮士るれそ
是ゆ梶子に差ゝ主計ゝ季科遣ゝ〻ゆる頃ハ弥生上旬主計以下
五人摂州と出帆し浪花ゝ着て爰ゝれ神社佛閣ゆ詣で十日の
夜浪花乃舟宮より便船し都とさして登りゝる無会ゆ〻〻ひ

して四表八表の物語浄瑠理あるハ笑話に無とも色るも有さ杜本と
ゝる所に至るに辛尓ふ一天黒雲發り雨車軸を流し時々ゝ雷鳴
類に暴風劉々して浪殘逆をふ佛名をとゝ念じつるハ泣こと
叫ぶ声雨に まぎれ〳〵みる〳〵主計が乗る舩忽ちふ轉覆して
乗合の男女舟頭水主に至るまで悉く水底ふ沈めるに五十掛主計
水上に ゆ〳〵ハ浮も両手ふ男女両兒をさ〳〵ゆけ浮つ沈つつ立泅して鳴へ
附ると見へて八逆浪ふゆり出されて岸ふ近付と見へて八再び風に吹戻
され今ハ斯とおもひるゝ男子を忽ち水中ふ投〳〵隻手を以て浪と
押切岸を目がけ〳〵泅ぎよる又一人の壯士水底より ゆ〳〵り出今取捨
〳〵一子を馬手にさ〳〵上弓手をのべ〳〵逆浪を掻分両人等く岸際に
おゝ付ると尚打浪に ゆり戻され左右ゝハ揚り得ど祈願一人

の農夫ゆ〳〵駈付つ水中ふ踊り入〳〵先に泅ぎ〳〵主計と抱〳〵
女子諸ともに難ゝ〳〵岡へ扶上ぬ後に残りし壯士ハ是則敷馬ふて
主計乃子息左門をかゝ〳〵漸柳の根ふ取付ゝ竟に岸上に揚りる
ゝに主計ハ数刻水中に苦〳〵めるとハ心神困労せ〳〵と見へ〳〵
梶子の助ゝ〳〵を見て農夫と喜しゆふ伏拜を竟に空く成たりる
嗚呼主計が義心可賞欣斯水中に困苦おぶゝ遺恩愛中る方ゝて
始ハ両兒を抱くとゝ〳〵ども竟に救得ざるを推し我子を捨て預し
梶子を扶〳〵ハ天晴武士の功あるべ〳〵斯て数艘乃家来ハ皆ゝ是死と
撰まび人と見まバ引上〳〵陸に漕付つ堤に上ゝ生たるハ
菜をゝ〳〵火を焚〳〵介抱をる内両止風静つて日東山を出るに互ふ
名乗合もゝ〳〵死骸に取付るゆけくも有て目を當らるぬ有様ゝ

是ハ扨置るの農夫數馬ふ向
てくく斯成うハ歎くく
詮る〜幸ひふ此童児斯無支
るあるするれバ亡霊も嗤悦ハ
せからんと何ハ兎まれ先我
弊屋に来玉ひく何ものの
御用意然るべかんとて主計
の亡骸と所乃者とうと荷と
せ其身ハ左門と扶掖先す
立くく歩るとバ數馬ハ其仁
愛と謝〜梶子と背にあひ



農夫の後べと將て山崎ふ至り
るに農夫まで家と入て妻離
と如此くの由と語りつ幸ひる
幼女二人まで持てるれバ其衣
服るど取出左門梶子に打着せ
炊玉焚桂款待りる數馬農夫ふ
向ひくるくく禮をなく
いるる由縁とよりてや見も知
ざる其許小命と救りと剣さと
斯まで懇志乃世話と預る段謝
そくに所るくれ我事ハ播州赤

私家の臣井関十内乃門人
徳岡數馬と申者あり此
幼女ハ則師の息女にして
梶子と呼て落命せし此丈夫
ハ同家中五十石主計にて是を
幼童左門殿なり實父ふてい此
度都見物に羅登る舟中不
意にかゝる奇難に逢ひ
貴兄の恩澤を蒙る先貴
兄乃性名を兼り度とて不
農夫答へいとゝ其危き

のがれて是を救ざるハ木石
におなじ某もとより或君に
奉仕し小録を玉はりし者
ふりくるる子細ありて浪人し
今此地に来り農業仮便とし
高濱松太夫と名乗ひかゝ
いとせをと住居るとハ保養も
思ひ任せびりくるる幾日數
ならるる療用をくゝ
そして頼母しくいとわるる
數馬いとゝ礼をのべ早速帰

九十

五十

國と志しけるとぞ今かゝる労困の身躰遠路覚束なくも去るゝ主計殿の亡骸此侭ハ差置かゝゝ村ふ心利なる人あゝバ御雇ひ玉ふんとて松太夫心を痛て駕一挺を用意し主計を息ふ躰して是ふ乗しめ別て一人心利なる男とそへ全用意調ひめきバ數馬ハ支のよくと委く認め播磨へ送り残る三人ハ高濱乃家に保類し家内ハ介抱なるゝ中にも娘沖津ハ當年十五歳ふ成りて心ぞへいと切なるが郎ハふげんの容顔麗しく少女にて有ける介抱ハ中にも登衣傍を放さず給支しけるバ數馬ハ如何すべき其切なるを悦びり斯して三日と経ふ先て播磨に遣りせし人ゝ共ふ井関の長臣なる者来りて十内の演舌委く通じ松太夫ハ叮嚀り礼謝ぞのかゝる急変の大

なれバ先何事も後ふ為して一先急ぎ帰國仕るべきとの支なれハ數馬も尤と同じて松太夫に向ひ此度乃厚志言語ふ中尽しがたし尚重ゝ礼謝し罷越べしなど移もらるれのゝ両児ハ駕ふ乗しめ両人引ちひ立出るふ松太夫家内門辺まで送り出る百りの離別の情を厚ゝて沖津ハ數馬乃袖をむゝ君今國に帰らせなば再び逢見ん支もかゝるべきに折ふりをもいとゝ止めさん支の成ぬに悲さ妻ゲ心を推し玉ふとゝ心有げなるり數馬ハ何乃心をけで斯ゝ思ふ預り此まに打過ん一度帰國致しるバ重ゝ礼謝し罷越べしとて急國へと志しける斯て沖津ハ只數馬の傍めゝ忘れさりしを言出ぬ物思ひり打卧めんど親ハ曽て是式もしびり成

病が發りしし心遣ひ大うさあらしば良医を招き介抱こそ
尽しぬ問話休題徳岡數馬ハ夜を日ついで播磨ハ帰り十内
〳〵北度難船に逢其身ハ左門を救上松太夫ハ主計様子伝抱上ゆ
ども主計ハ終命〳〵次第松太夫親子の介抱其余乃一五一十落もなく
物語り十内ハ只呆果て計ふ〳〵有しが斯て有べき支ゑ〳〵ハ五十
插の長臣ハ高儀〳〵殿へ斯と言上をゝる城主政則公聞召まし卑賤奴
僕女児なんどの謗りなどされ奉仕の身にて軽き敷遊行をゝる
うに況水中ハ溺死せしハ其罪軽きれあるべしして則死骸ハ忤す
下され三日の中に屋舗を立去へしの厳命にて且又十内も同心せ
〳〵科ハ〳〵て十日の閉門仰付られる斯る五十插ハ両人の子息
に長臣随六のみ〳〵外に縁類もなれば井関より數馬と遣し

かさびくの葬式を営む日限ハ成れば第伝さしつげ両人の男子
ハ密に井関に引とり随六ハ身乃廻りを仕立るべき黄金
を惠まれしも仕官にさして暇遣しる北度難船の支世
上に其沙汰弘く播磨赤松家の倍臣數馬とて壮士其郡水中れ
働き目覚ましく噂ありしを播磨ハ此流言専にして
數馬伝知る人々ハ訪ひ来りて賞嘆しる斯る十内ハ十日ま
門門も相済殿へも御目見上れぞ此上ハ高濱松太夫に一礼せて
ば有べきと其用意をもとる却説高濱松太夫の郎神津ハ過
し頃數馬を懸相てしより一時忘るもなく心計ならべれて
覚て病乃床に卧て今ハかゝる危くを見へれば或日母離神津
の枕辺に寄て詞をひくして言りるハ未通女此頃の疾病妄

く推してれぞや斯親と子れ中ふ何包をかくを支やハ行る男人の
むしハ明白ようしてよ兎も角をして得させんと遂思ひとのぐて
一日も早く全快せぞ両親乃悦び其身ハ幸日頃の幸者も今此時と
待るに何とまれ色まび語を聞せうしと泪と俱に尋ね給ふ沖
津漸頭とりうげこハ多躰ありさ御詞を兼りゆしひらぐや左程迄乃
仰ふ色を侍しんやうもゆしいりを怒を思びく妾が病根を除を玉ひと
らし恥し紀夏ふ侍れど過し頃播磨の御壮士数馬君の漂泊しゆひ
此家と入らせ玉ひくまと恋の重荷を負初てりて岩間ゆこ逆路も
かくと恋路と思へかど泪の滝と諸袖乃乾く間もなく憂恋のせ
めてありひハりさびとる給支るどしくべしバ妾の罪れりろひ侍
らんふし跡ハえいるて枕ふとと打卧めるに離ハ左こそと思ひて

さど何と言とうんとすぐる彼く先良人松太夫ふ此事を語て兎せん
角ぜんと思案り頭を傾けめるに外ろ方と案内して一個の丈夫家
僕三四輩伐俱し拉太夫主ふ対面りて度由言入るに離立出ゆづ席
の塵を打拂いて是へと請じて上座と居しめ松太夫ふ斯と告るる
誰人ぞやと立出遥下座に薄跪して主松太夫ハ小人りてハ未得尊
顔貴客ハるる何所の官途ふて何尋れ妻育てる如是白屋へハ入らせ
と尋るに丈夫呑て如告妙てる対面某ハ播磨赤松家の臣井関十内と
申者去る頃不意も某親族風波の難り逢し砌其許尋乃厚志謝
をるに所命し早遠羅越べきの所其後如此ようして五十栖の
家断絶せし事其身閉門せし事ゆて委しく語りれぞ松太夫夫
婦も大ふ驚き叔其砌乃光景一五一十と告ふ数馬の言るに違ハさ

とバ且畏且悦び叮嚀ふ禮とのべ荷器より一巻乃絹一包の黄金と取
出し似肆ゆゑひつきと聊好志ゆゑ謝せん為ふゆゑ〳〵バ笑納玉はるべし
と差置き松太夫まづ一度是を押戴きて十内が膝下におしやり其
零ゑ落てバゆゑ〳〵ども以前ハ小禄なる玉はり〳〵者箇些の働きゆゑ以ていく
ら如斯謝物を受納ゆゑんやと差戻さんと十内再三辞ゆゑとゆゑど
も只固辞して受べきやうもみへざれバ十内も今ハ詮方なくて手を
又き額をかきて良久吟して居たりけるが傍に有る熟〳〵と思
ふ娘沖津為て數馬を慕ふゆゑ幸ひとおもひ十内乃前ふ手を
つかへて言りけるハ妾良人ふ願ひ奉る一儀なりとゆゑれ許諾玉はり
やと問ふ十内頭をもたげ問ふ迫ふもゆゑど何ゆゑ固辞
申ゆゑと回答ゆゑれバ離ゆゑ辱曲と謝し夫先ゆゑ〳〵斯

零ゑ落ハ仕ゆゑ〳〵ども本ハ帯刻の身なれゆゑひきとバ捨曲救直の性
質にして今村邑ふ侠夫なゆゑ呼ばるゆゑ〳〵ハ畢竟此金子受
納ふ事ハ思ひもよらぬゆゑ〳〵ハ相公の斯まで仰ゆゑ支固辞
申ゆゑ又君を煩はすに似たれバ妻が願支調玉はり是を増はり厚恩ハ
ゆゑ〳〵ハ別の子細ふもゆゑど我等夫婦の中に両人の娘ゆゑ
婦なる者を沖津〳〵呼び〳〵當年十五歳にして鄙ふ生育なれども農
業式忘悪武乃家に奉仕せん支を願ひめとバ御用に立べき者なり
ゆゑ〳〵召遣ひなるるバ親子の悦び是ふ増〳〵支ハゆゑ〳〵ハ〳〵と余義
なく〳〵遂るゆゑ十内悦の色式顕ハ〳〵なれハ望てもなき幸ひなれ〳〵
如く某一人乃娘をとりてバ無て年頃の願を求ひゆゑ折柄なれバ無疎意
召遣ひなべしと許諾なれハ松太夫離も大ゆゑ悦び奪房ふ入き〳〵沖

のちの十内
浅沢寺

津と是を告んとて立出るに沖津此支を立聞て早願恩調心地して悦ひ立出るに地頃病苦て逼るとくるも本粉黛をからべして美麗の少女梨花の雨を帯る粧ひ類ひ希なる容色なるをバ十内つくづく思つるに此娘農業を忘恵も宜なり鄙て似る女なれと心中に賞て直ち屋舗に伴ふべしとて沖津ハ速に病労を打忘れ其准備のことどもを斯て十内ハ此夜そ爰に逗留て終夜互に其義気を談話て翌日に至りて惣て其用意悉く調ひなをバ十内ハ沖津を伴ひ奴僕諸共立出るに松太夫夫婦妹娘阿磯と共に村境まで送り出つ互に離別を惜て西と東に引別れぬ是や親子姉妹生涯の別となるぬ

扨て是非もなき浮世なり却説十内ハ松太夫が娘沖津を伴ひ播磨に立帰り數馬を始め梶子左門陸治良に至るまで如此くの由を物語る沖津を小姫子に召遣ぬれども恩義なる松太夫が娘なをバ万心伏付て無疎意りて事ける沖津ハ基數馬を眷恋せ支ゆ此家に奉仕と願ひ逸夫とも言出るに折もなくハと暫くハ同席に座を楽に月日を重るうち其年も早過て翌年弥生に至りて主計が小祥忌に當ぬをバ十内ハ左門陸治良両人を誘ひ墓前に詣で寺に布施して尚叮嚀に吊ひなる去程に沖津ハ兼ての恋慕弥増どいとでぞ過る日なれ色ある出さで只独思へバ苦し栗栖野の氷室乃氷解せぬ思ひの程ところ〳〵と壺の石章かさつ〳〵彩人をもをび數馬が手皆の内に入置ぬ斯くハまくで數馬ハ物取出んとて皆伏ひらくに女の手跡にて封じふせざる爰あり

れば何心なく披見るに沖津乃友ふして先達て山崎に漂泊の刻恋慕て
今同じく家に来りて思ひ絶る消息せしといと切に認めたるまバ数馬
忽ち愛慕乃心生るといへども今斯る無正支して師の耳に入るバ
いろ〳〵怪事も発らんと田吾ぞせバ過せしが或日沖津人なれ折
と考へ数馬が部屋に行くに口説るハ先ふ爲て思ひのうちを聞へつ
きども田吾ハふ仕玉りぬハ嗤讃襲者と御恥しめもゆゝんとハ推し
なぐ〳〵もあるよ中に深く〳〵恋衣色も今更恥しれりて人ふる知
るこゝも生く思ひを重ねんより死ぬる覚悟なれと数馬が差ぞく
取直し既に自害とみへられバ数馬ハ同章押止め斯まで思ひきこも
る式辞退ふを〳〵ども某も今十内殿の食客乃身なれバ左思
右思く黙止るり替死慕りるゆゝと争ら兼引せざるんや

沖津が背らい拝く〳〵ふ〳〵ぬ田吾〳〵られバ沖津ハ聞て今更て酢
ら心地しつ嬉さ余りよゝと泣とゝ音高く人や聞く又の逢瀬
と約しつ是よりして深き契り式結べ〳〵知者更りるけり
斯て兎烏を送る内数馬ハ兵書剣法惣く武の道に心を委祢出情
怠りるに別て数馬ハ衆ふ勝れ〳〵るをバ十内も大に感安三
年を歴て数馬廿三歳に成めるバ今ハ家の秘書ふとゝく譲られバ
諸門人を数馬を師乃ごく尊ぶる此一朝十内何ぞ病苦ふ
しに卒介に心痛発し暫時の中に断命たり数馬掘子大ふ驚ろた
親族へも人を馳医師を招き左門兄弟沖津まで〳〵ぐ介抱手を
尽ぶ今更ちべき甲〳〵ふられバ親類門人朋友も只泪ふぞられ
たりる斯て有べき支るに終バ殯へ斯し闇上めるり君ふも一

入おくまセゐひ種ゝ御心添あるて葬式のこゝる方なゝ取営だいの
烟とゝ果ゝ家族門人寄集りて継家乃評議ゝゝ成ゝ
折節上使ゝゝ春城出羽之助入来ゝる人ゝ席を退て出羽之助を
上座ゝ居ゝめ類族真部志津ゝ羅出上意の趣を聞ゝ出羽之助
ゝゝゝゝ此度十内の落命殿ゝ一入おゝまセ玉ひ井関の家ハ代ゝ
赤松一家ゝ兵術乃師ゝゝゝ依て家の絶ん支嘆き思召ゝゝ付
無ゝゝト内ゝ男子なく娘一人ゝて由聞召先達て風難の砌り
功を成せゝ数馬といゝる者頗ゝ兵道ゝ熟練ゝ且十内乃縁家ゝ
支と聞召及ゞ此度娘梶子に聚せ数馬を十内ゝ名乗ゝセ井関の
家系相續ゝくゝ由御仁恵の御上意ゝゝ御請申然ゝゝと
告ゝゝ志津ゝをゝめ諸門人も無て斯ゝて有ゝゝめと思ひ

ふゝゝなゝば大ゝ悦び上使出羽之助とゝもゝりてなゝ有ゝゝ
御請申上ゝ由のゝゝれバ出羽之助も共ゝ祝ゝて退出ゝゝ数馬ハ
小泥子沖津ゝ内ゝ通ゞゝ支ゝれゝゝゝゝハ口外ゝ出ゝゝゝ支ゝ
初ハ未熟の藝に支とゝゝ再三辞退ゝめゝゝゝ志津ゝを婚
諸門人乃ゝゝゝゝゝゝゝ相公の上意れ重ゝんバ竟ゝ領掌ゝなゝ
ゝなゝ是ゝん一条の怪支の基悪因縁めゝゝなゝゝゝ斯て志津ゝ
ハ翌早朝数馬ゝ衣服上下を改めさセ取次ゝゝゝ城主赤松政則公の
御前ゝ罷出昨日乃上意の趣を有ゝゝゝ仕合候悦の段申上ゝゝ
相公ゝを尊顔ゝゝハゝゝ衣服上下其外種ゝ出物等下され数
馬ゝ十内ゝ改名ゝ井関の名跡相續の義仰付ゝれゝゝゝゝゝ有
ゝゝ御請申て退ゝゝ是ゝ依て日伐撰ゝて梶子と婚礼なさ

しめ一家中門人衆よりも祝寿て弥目出度納りぬ扨も當十内て
其性温良篤實ふして仁恵を宗〻人ふ逆らぬ支なく人ふよく
親〻て君乃思召もめでたく殊ふ藝道ふ於てを先十内ふ省ら
ざれバ一家中れをあ〻び他家よりも多くほどひく此門ふ学へバ
孟家富栄へり然るに妻梶子ハ夫ふ引ふ面ハ芙蓉の花をめざ
とくども内心ふを荊曲の針を抱て飽まで姦まし〻く殊ふ下
賤の匹夫よりとくども恥悪むべきハ奸淫の道なり況〻大家の
師範なる武士乃妻ふして他淫を肆に〻彼五十插左門と密ま
黙含葛城の夜乃岩搗あ〻で日毎ふ社参佛参ふ事よせ左門を
伴ひ酒色を支〻うれ歩行ふて憎ま〻を左門ふ〻
水中ふ死をぐ〻を當十内ふ助けられ家

ふ引〻仁恵を加へ〻序をあるふ其恩義ふ思ふ殊ふハ殿の
御差図をはて婚式結び〻梶子ふ奸通し且奸婦と謀て十内を
ふを者〻井関乃家を押領せんと私ふ工ひて恐〻れさん共
十内曾て是ふ応ぜ〻梶子の性質肝悪なる支平常ふ是を憂
とくども豈計らんや左門し奸通して剛浅間敷ふをうんとハ
是ふん丙午ハ年なる梶子を正室とし崇ぐ〻且左門を
丙午の生まれぞ梶子と斯まて契り深ふも悪因縁〻やうに
然るふ左門陸治良ハ兄弟〻ハ生を仇〻麻逢の相違なるて陸治
良乃天稟発明〻て走るも五常の道を守り十六歳ふして剣法
柔術ふ妙を得て〻れバ十内も二ふ〻者〻思ひ密ふ奥秘をゆ
〻書巻ふ授置〻るふ梶子左門の両人兎ふ角陸治良在てハ

奸計の妨げるれバとて種〻譏言みどりいるふ十内も詭〻ハ知るる
が〻梶子ハ家の娘るれバ其意弐推〻正しが〻聞入るるおりら
ふて密〻少しれ金子を与へ何方へも奉公し修行ひ〻しとて
家を去しあり且説十内ハ妮子沖津と雲雨乃契り深くおし
衾の数重りて沖津も此頃妊胎身となりるれバ正室梶子の姦〻
ふ心置を包むとれども乃ち細布ゐで胸ひるめいりなる
希有とる引出さんと両人等しく心弐いあまたの方へや預るん親の
家へや帰らせんと密〻談じ合るに梶子ハ是とさるつよ幸こ
と出来るれと何気なくおりらるる或日良人の傍り居るつ
沖津を呼寄囘押めひ〻言りるハ扨しも聞へ〻なる我夫ぞ
うし井関の浦乃沖津洲〻かるいを舟とはるぞ〻め水りるさど

〻契り玉へる支〻〻〻知て侍るとも恪気疾妬もひ〻んりと疑い
思をまどれるもひ〻〻ハ其夏の影讓〻知ぬ白り過せ〻りとも今ふ
斯〻も岩田帯の聞初ど志れし妊娠ふりるるとやいりなるをハ左程まで
妾〻匿〻ひるるぞや尊賤ゐ〻〻〻色情に分別ハひ〻ざるぞ
〻〻去程り女ハ五障の雲深く妾前世の業因りや今に懐妊の時
玉ら密ふ佛神〻願ひ〻侍るとも其ひのあ〻ぐるに今斯沖津の
身〻良人乃御種弐孕〻〻ふて顔ひてもなるさ幸ひく侍るるれ沖
津分娩ふゐりるとハ男児女子ハ兎まれ角まれ妾が子〻〻玉ひ
去なが〻ひるれハ沖津ゐると謗ふも産ハ生死の境〻〻ぞ定〻
臨産乃苦〻ハ左〻そと思ひ侍るに出生ハ妾が子ふせんとハさぞ
や無力ゐがさんるれども何〻付て家ふて大切るれまぐて妾ふ

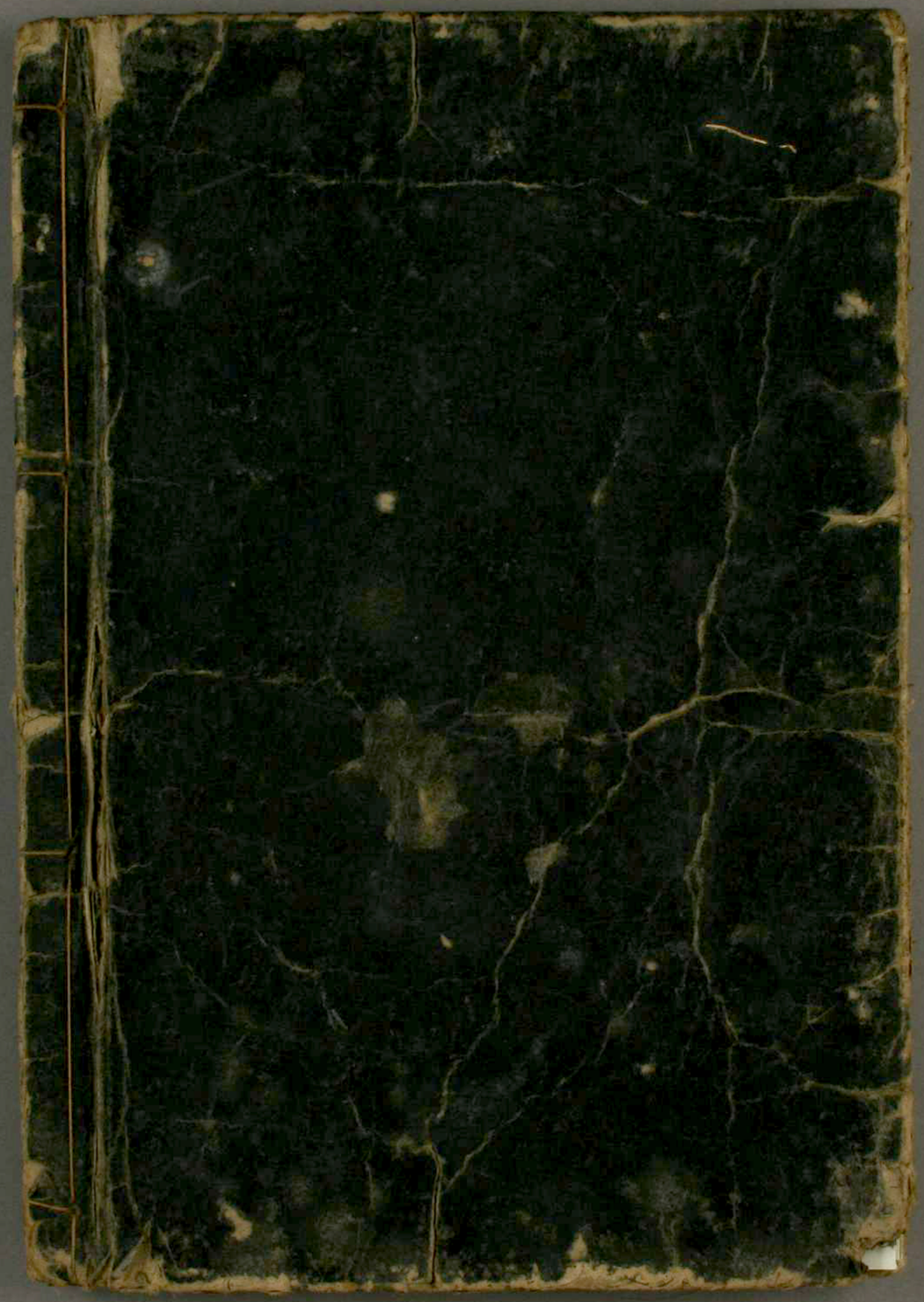
かしこ

左門

得させようしと仲津が脅かるるでついと信ずらていてうれば當下沖
津頭と擡げこハ超思嫡室人の御意とも思ひ侍らに御目を掠め大
乃御矢君ふ賤卑妾の密支いつせ一罪軽うしていうあう御掟ふひひい
ともに露いさうう恨奉るすじどちて存じ侍るに夫す引く斯
御慈愛の御意冥加空怖しくぞんじ仰の通なしもれあど
乍恐乳母となり参せ大切すり育上奉らんとて嬉しけに四答
ども十内ハ最前より梶子が詞の実るる残いづう彼ケ程まで見せ
の女ようとて却くいう成ようあうんと思へども理ま當りてきう詞
なれバさすが故十内殿の嬢女あるとバと大ふ賛嘆し我も安堵す
して喜びとのぐらるる拙程ふく月満て男子を出生し名を浦
太郎と号て蝶よ花よと慈愛うる嗚呼梶子が心中いう成ず斯

信ずしく言なして我罪を他ふ負せんの奸計憎てを懐むこの
悪心ろう是ふん誘ようる侯人の言甘さ夏蟲の如く人を害事
利劍のごとくハ斯る者をや言べし或日梶子ハ高砂明神へ恭詣
せんと乳母仲津ふ浦太良を抱ゑ例の左門ず僕一人婢女を召
連明神ま詣で一軒乃休足所ふ女ともひ酒肴を取寄るふ夫れ
食しつ梶子仲津ふ向ひく言りるハ主ハ暫時爰ふ待ごろ
しんま徐寺ハ濱辺ま行て見給ひ多ごして平常れ憂とも晴
しいされバして端近へる出ひを與ふ乗じて寶の玉し疵ふ
付そ妾ようと頃ま左門殿を持く向ごしなど信だらて影見へ
まで見送りつ立帰てて左門ふひ声を潜めて言りるる斯
表に仁慈を見せめるも計略の基ともようで十内殿を始め仲津

家内の者も妾孤二多紀者と思ひ居るふりつ近是てけるんより早く
副較を為課せて楽ゝと極めんよゝ紀方便と聞まかしと苛刻ゐぞ左
門頭を右左り打ふり是捏の大支と軽ゝしく行よ所ふけるに手ゝ
下して殺さバ家の断絶眼前なり左ける時ハ労して功なし我熟ゝ
思つゝ一奇薬と用ひゝ病孤発さめ斯ゝ計ひるバ支なく宿望
成就せんと耳口寄ゝくて密語られバ梶子ハ満面ふ笑を含其奇芸
中有と尋めるに夫ゝ於てハ爭ふ用意せざゝんやとて懐中より一
包の香を取出し梶子に逓し只顔悪計と私話て黄昏近くるゝ
ハ残余乃酒肴をもゝうに呑食さて掌と打るゝに酒家のふ
厠いとおゞく癒つ立出られバ梶子懐中より砕銀三四箇取出引さた
紙ゝくゝと引結びて酒銭を算して余財もけしバ此後の補不

足ゝせゝと言つゝ渡して立出るに小厨是と額ふ押當門辺まぐ
送りいで再入来ゆゝるゝバ嘉肴清酒を別ふ准備置りゝん小漫ゝ
地歩ゆせ玉へと見送りて小厨ハ家ゝ入られバ梶子ハ左門と共ゝ
人ゝ乃戻りやとゝるゝと見廻しつ扨も心無の者ゝかゝと紀頃ゝ
ハ帰り来ぐゝるゝおゝと怠慢的人ゝ紀しおめゝ恣と罵てるに皆ゝ
帰り来ばいざ速ゝ退出ゝて両人ハゝるゝ先ゝ立直ゝ道と
横ゝ行蕊ゝと胸ふおゝ包ゝ館弐さて帰てゝ

繪本黄草紙卷之壹終